

## 大学教育学会 課題研究活動報告書 (2021 年度)

提出日 2022 年 3 月 22 日

報告者 塚原修一

課題研究テーマ	コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～
代表者 (所属)	塚原修一 (関西国際大学)
メンバー (所属)	サブテーマ 1: 塚原修一 (関西国際大学)、濱名篤 (関西国際大学)、山田礼子 (同志社大学)、川嶋太津夫 (大阪大学)、森利枝 (大学改革支援・学位授与機構)、白川優治 (千葉大学)、深澤晶久 (実践女子大学) サブテーマ 2: 千葉美保子 (甲南大学)、村上正行 (大阪大学)、岩崎千晶 (関西大学)、川面きよ (帝京大学)、浦田悠 (大阪大学)、遠海友紀 (東北学院大学)、嶋田みのり (東北学院大学)、多田泰紘 (京都橘大学)、石井和也 (宇都宮大学)
担当理事	白川優治
コメンテーター (所属)	溝上慎一 (桐蔭横浜大学)
実施した活動	<p>新型コロナウイルス感染症により、オンラインによる非対面授業が大学に余儀なく広まっている。こうした状況における大学教育の可能性をさぐるために、本課題研究では学生の学習を支援する学習環境デザインと学修成果の評価を取り上げた。2つの異なる接近法を並列させて、サブテーマ 1「非対面大学教育における学修成果の評価」と、サブテーマ 2「ニューノーマル時代における学習環境デザインモデルの構築」の研究をすすめ、教育実践研究の専門家をコメンテーターに迎えて両サブテーマの連携と統合の推進をはかった。</p> <p>サブテーマ 1 では成果基盤型教育 (Competency-Based Education, CBE) を取り上げたが、そこには授業だけでなく学修成果の評価を遠隔的に行うものがある。CBE では、教育課程を構造化することで学習が完了していない領域を識別し、その部分の学習を学生に求めるとともに、専任の学習指導員を配置して学生の進捗度を確認し、学生の質問に対応して学習を支援する。CBE は社会人を対象とした米国の職業教育にみられる方式であるが、本学会の主な関心は社会人学生よりも伝統的學生にあり、職業教育だけでなく一般教育や専門教育を含めて幅が広い。そこで、米国の状況と日本の先進事例の調査を組み合わせる日本にふさわしいあり方を構想する。2021 年度は国内外の情報収集をすすめ、成人学習 (社会人の職業能力開発と評価) とそれへの大学の関与について日米欧の状況を整理し、成果の一部を第 43 回大会のラウンドテーブル (2021 年) で報告した。また、米国の CBE の理論的検討を行うとともに、事例の分析と CBE の体験によって考察を深め、成果の一部を 2021 年度課題研究シンポジウムⅢにおいて報告した。</p> <p>サブテーマ 2 では、コロナ禍を経た新たな時代における学習環境のあ</p>

	<p>り方を検討し、(1)「ニーズ分析や実態把握」、(2)「評価指標の策定、実践の評価」、(3)「Tips 集の開発及びワークショップの実施」の3つのプロセスを進めることにより、学習環境デザインの新たなモデル構築を目指している。2021年度は、大学の学習支援環境が大学経営者や教職員、学生、保護者等から求められているニーズを整理し、担当部署や担当者がそれらにどのように対応し、学習支援環境を構築、運営しているか理解するために、プロセス(1)「ニーズ分析や実態把握」に着手した。まず、コロナ禍以前・以後における学習支援環境や学習支援制度に関するこれまでの複数の調査結果を整理、検討する作業を進め、2021年度課題研究集会シンポジウムにて報告を行った。また、シンポジウムでの2018年度までのラーニングコモンズに関する文献調査に加えて、2019年度以降の文献について同様の調査を継続するとともに、国内の大学におけるラーニングコモンズ等学習環境、学習支援環境の運営を担う教職員に対するインタビューの予備調査を実施した。上記調査の成果の一部を大学教育研究フォーラムにて報告した。</p>
<p>成果</p>	<p>第43回大会ラウンドテーブル11「非対面大学教育における学習成果の評価」(2021年6月5日)。サブテーマ1の成果の一部を報告した。  濱名篤「非対面大学教育における学習成果の評価」をめぐるとの背景と課題」  深澤晶久「日本における成人学習」  山田礼子「米国における成人学習とCBEの可能性」  塚原修一「欧州等における成人学習」</p> <p>2021年度課題研究シンポジウムⅢ「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～」(2021年11月28日)。司会：村上正行、報告：山田礼子、塚原修一、千葉美保子、川面きよ、遠海友紀、岩崎千晶、コメンテーター：溝上慎一。学会誌44巻1号に以下を掲載予定。  塚原修一「課題研究シンポジウムⅢの趣旨説明」  村上正行「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対策・方法・内容～」  山田礼子「米国の成果基盤型教育(CBE)に関する理論的検討—ニューノーマルに向けての可能性の模索」  塚原修一「米国の成果基盤型教育(CBE)の事例報告—ブランドマン大学」  千葉美保子「『ニューノーマル時代における学習環境デザインモデルの構築』の研究目的と背景、研究計画について」  川面きよ「コロナ禍以前の学習環境に関する文献調査について」  遠海友紀「コロナ禍の学習環境に関する調査報告」  岩崎千晶「日本の高等教育におけるライティングセンターのオンラインチュータリングを考える」  塚原修一「2021年課題研究シンポジウムⅢのコメント、応答、まとめ」  その他の学会発表。サブテーマ2について以下を行った。  川面きよ、千葉美保子、石井和也「コロナ禍におけるラーニングコモンズに関する議論の変化—文献調査を中心として」ポスター発表、第28回大学教育研究フォーラム(2022年3月16日)。</p>

残された課題	サブテーマ相互の連携と統合をすすめる。サブテーマ 1 については、 <b>2022</b> 年度の課題である国内の事例調査をすすめる。サブテーマ 2 については、今後も引き続きインタビュー調査を実施し、学習環境デザインのニーズ分析を進める。これらの分析結果を基に、プロセス (2)「評価指標の策定、実践の評価」への展開を目指していく。
--------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------